

幽霊師団、



+DG7

1940年2月6日、エルヴィン・ロンメルは、かねてよりの念願であった機甲師団長の職に任命された。

ゴードスベルク所在の第7機甲師団長であった。後にこの師団が幽霊師団として歴史に名を残し、ドイツ電撃戦の権化のように讃えられることは、ロンメルを除いてまだ誰も知る由もなかった。

彼が師団に着任すると共に最初にとった処置は、指揮下の各連隊長に休暇をとらせたことであった。彼は、戦車を中心とした機甲部隊の指揮方法の研究、また、指揮下各部隊の組織構成、そして個々の下士官・兵士達とのコミュニケーションの確立を図る上で、先入観に惑わされたくなかったのである。

前年9月のポーランド戦の時、ロンメルは、前線におけるヒトラーの司令部管理部長という望んでも得られない特権的地位にあり、ヒトラーと常に行動を共にし、各野戦軍部隊からの報告会、総統司令部での作戦検討会および作戦会議等すべての重要な会議に出席できる立場にあった。そのようなことから、彼は戦車の持つ戦術的可能性、機甲戦、近代的包囲殲滅戦の概念等についてつぶさに研究を行ない、そして学ぶ絶好の機会を得たのである。

第一次世界大戦では、天才的で大胆な歩兵将校としてその名を敵味方に馳せていた彼が、よりダイナミックで創造的な部隊の運用を望んでいたことは言うまでもない。

ヒトラーは、ロンメルの著書「歩兵の攻撃（Infanterie greift an）」を読み、彼に対する感銘を覚え、また、ロンメルが度々ヒトラーの護衛隊長を勤めたことにより、ロンメルという人物が陸軍の参謀本部の軍人達と違い、ヒトラー好みの独創的な閃きと近代的な戦術概念、そして新生ドイツが求めるダイナミックな軍人であることがわかり、彼を大いにひいきにした。

ロンメルも、ヒトラーのことを新しいドイツを造る創造的な指導者として深く信頼し、尊敬していた。このように互いに尊敬しあっていたことから、ヒトラーはロンメルの希望、すなわち、機甲師団長の指揮官ということに即座に快諾し、陸軍総司令部の反対を却下のうえ、第7機甲師団長に任命したのである。

彼のストイックな生活は早くも始まり、朝5時には彼を乗せたベンツが師団駐屯地の営門を出て各部隊に向かった。

2月も末になると、ロンメルはすっかり機甲部隊の実体を知り尽くし、彼自身の考えによる戦車戦の理論に基づき部隊の指導を始めた。

彼は、師団に着任と同時に自身の著書である「歩兵の攻撃」を持参し、主だった部下たちに読ませた。つまり、これから始まる機甲師団の作戦について、急襲作戦の場合の歩兵部隊指揮官が実施するのと同様の感覚で、戦車部隊を大胆に運用しようと考えていたのであった。

彼は、第7機甲師団が戦車2コ連隊を持つ普通の機甲

西方への突破

伊達博昭

対フランス電撃戦時、その機甲師団は常に友軍部隊の先頭を切って進撃を続けた。神出鬼没・変幻自在の戦いぶりで、イギリス・フランス連合軍を翻弄し続けたその師団は、敵から畏敬の念を込めて“幽霊師団”と呼ばれた。その師団の名はロンメル指揮する第7機甲師団。のちの砂漠のキツネは、いかにして部隊を運用し、フランス軍を突破したのか。

◀出撃するため38(t)戦車に乗り込む第7機甲師団の戦車兵たち

▶土手を越える38(t)戦車



師団と違い、第25戦車連隊1コ連隊のみの編成であり、保有戦車数218輦のうち、半数以上がチェコ製38(t)戦車により編成され、III号戦車およびIV号戦車の配備は僅かであること、また、師団の兵は主としてチューリンゲン地方出身の兵で構成されており、同地方出身の兵は軍人として優れているとはいえないという定評があることを念頭に置き、猛烈な訓練を実施した。

大部隊あるいは小部隊ごとに、快速で行動する野外演習を実施させ、無線通信を利用した連携作戦、正確な射撃について徹底的に訓練を行ない、夜は小隊長にいたるまで、将校全員を集めて訓練の講評を行ない、11時まで書類に目を通した。そして、朝6時には起きて、ライン川に沿い、森を抜けて駆け足を行ない、体調の維持に努めた。彼のスタミナとその体調は驚くべきものであった。

ロンメルはライン河畔に設けられた第7機甲師団の集結地からベルギー国境にいたるまで、師団の進撃路に沿って、主進撃路であることを示すDG7と記した標識を立てさせた。これは、参謀本部から固く禁止されていた行為であったが、この標記を立てた経路に沿って突進し、自分のライバルである他の部隊よりも先にイギリス海峡に到達するつもりであった。

第7機甲師団は、ヘルマン・ホト歩兵大将指揮する第15軍団に所属し、その上級機構はハンス・フォン・クリューゲ上級大将指揮する第4軍司令部であった。

5月9日午後1時45分、フランス侵攻作戦開始を告げ

る「ドルトムント」という暗号による指令が伝達され、翌5月10日午前5時35分、彼のフランスでの戦いの第一歩が開始された。

＋マジノ線前面

師団はその後の19日間、DG7と記した標識の立てられた進撃路に沿って、すさまじい速度で前進した。1917

フランス軍は、当時の水準としては強力な戦車を有していた





進撃する第7機甲師団の38(t)戦車部隊

年にロンメルが実施したマタイユールの急襲作戦の場合と同じように、敵の士気にショックを与えれば、自軍の側背がガラあきになるというリスクを減殺してなお余りあるほどの効果があるという計算のもとに、敵の反撃を無視して英仏連合軍の背後に向けて大胆に突進した。

このような急進撃の結果、第4軍司令部と連絡が途絶え、後方からは僅かな兵站支援を受けるだけという状況

ベルギー国内を進むドイツ軍部隊



下にあったが、独力で攻撃を続行した。敵が断固たる決断をもって迅速に反撃したならば、第7機甲師団を殲滅する可能性もあったが、敵はロンメルの計算通り、パニックに陥入り、やがて壊走状態になり敵部隊の士気は崩壊してしまった。

進撃に当たっては、ロンメルは常に師団の先頭にあって前進した。また彼は、シュトルヒ連絡機に乗って戦場上空を飛び、師団の先頭を前進中の戦車部隊の間に着陸し、状況に応じた作戦命令を与えることもしばしばあった。

このようにして、開戦から僅か2日後の5月12日には、師団は川幅120mのミューズ川の線に一番乗りした。歩兵部隊は、翌日の午前4時半から、ゴムボートによる強行渡河を開始したが、対岸からの砲撃により大きな損害を被り、大変な苦境に陥入りつつあった。ますます激しくなる敵の砲火の下で、突撃工兵達が必死に橋を架ける作業を行っていたが、ロンメルは自ら腰まで水に入って、材料を運び、兵士達と共に立ち働いた。この話は直ちに師団内に知れ渡ったが、このように師団長自らが命を危険にさらすことにより、衰えつつあった士気は劇的に回復し、その日の晩には戦車と対戦車砲の渡河が完了した。

再び進撃するに当たっては、彼は付近の民家に火を付

▶第7機甲師団長エルヴィン・ロンメル少佐。彼の師団は、その神出鬼没さから幽霊師団と呼ばれた
▶▶高速で移動するII号戦車



けさせ、煙による煙幕を利用して進撃を開始させた。また、戦車部隊の指揮官達に無線で命令を与える場合、秘密が漏れないように、彼自ら考え出した前進軸システムを用いた。これは、将校全員にあらかじめ定めた各自の地図上の2点を鉛筆で結ばせておき、どのような地点でもこの線からの距離を報告することにより、その位置がわかるようにしたものである。今日ではこの方式は、どの国の機甲部隊指揮官達にも受け継がれている。

また彼は、敵が防禦線を設けていると思われる場所において、敵の防禦配備の形態を知る方法として、戦車連隊の全戦車の火力を浴びせることによって、敵の射撃を誘発させ、その位置を暴露させるという仕掛け花火方式の戦法を案出していた。例えば、敵がある森林を保持している場合には、すべての戦車に対してその森林に向かって無差別に射弾を撃ち込ませながら進撃することにより、敵の応射を誘発させ、位置を確認したのち敵を各個撃破したのである。

このような攻撃方法は、弾薬の浪費として参謀本部からは明確に禁止されていたが、彼は、配下の各指揮官に対して「相手方に先に火力を浴びせた方が勝ちだ」と語り、この攻撃方法を推進した。

この頃になると彼は、もう1コ戦車連隊が欲しいと感じ始め、友人であるヒトラーの副官ルドルフ・シュムント大佐に出した書簡で次のように述べている。「正規ルートを通じて申請してみても、それが受入れられる望みはない。あまりにも手続きが煩雑だからだ」。またさらに、自分の戦車戦術に関して次のように述べている。

「砲兵に全力をあげて目標に射撃を加えさせつつ、これに向かって戦車部隊を突入させ、友軍砲兵の射弾によってわが軍の戦車が破壊される寸前まで砲兵の射撃を続けさせる方法は、非常にうまくいっている。当然たくさんの砲弾を消費するが、この方法によって戦車や兵士の損失が驚くほど少なくてすむのであり、敵はこの作戦に対する対策をまだ考え出していない。この方法で攻撃を加えると敵は神経がすっかり参ってしまい、明らかにわが

第7機甲師団の戦闘序列

師団司令部

師団長 エルヴィン・ロンメル少佐 (甲)
参謀長 フォン・デム・ボーネ中佐 (参)
作戦主任参謀 オットー・ハイドケンパー少佐 (参)
情報主任参謀 フォン・メツチュ大尉 (参)
后方主任参謀 ツィーグラール少佐 (参)
師団長副官 シュレープラー大尉 (甲)
党派遣師団長副官 カール・アウグスト・ハンケ中尉 (甲)
師団軍医長 バウマイスター大佐 (医学博士)
師団経理部長 フィービヒ参事官
師団法務部長 シュルツ法学博士

第25戦車連隊 カール・ローテンブルク大佐 (甲)
第1戦車大隊 シュミット少佐 (甲)
第2戦車大隊 イルゲン中佐 (甲)
第3戦車大隊 ジーニケウス少佐 (甲)
第7狙撃兵旅団 フュールスト大佐 (歩)
第6狙撃兵連隊 フォン・ウンガー大佐 (歩)
第1狙撃兵大隊 フォン・パリス少佐 (歩)
第2狙撃兵大隊 ユンク中佐 (歩)
第7狙撃兵連隊 グスタフ・フォン・ビスマルク大佐 (歩)
第1狙撃兵大隊 ハンス・クラマー少佐 (歩)
第2狙撃兵大隊 バッハマン少佐 (歩)
第7オートバイ狙撃兵大隊 フォン・シュタインケラー少佐 (歩)
第7偵察大隊 エルトマン少佐 (甲) 戦死。後にフォン・ルック大尉 (甲)
第78砲兵連隊 フレーリヒ大佐 (砲)
第1砲兵大隊 ケスラー中佐 (砲)
第2砲兵大隊 クラーゼマン少佐 (砲)
第3砲兵大隊 フォン・ケロンヘルム少佐 (砲)
第58工兵大隊 ビンカウ少佐 (工) 戦死。後にメルテンス少佐 (工)
第42戦車獵兵大隊 ミクル大佐 (甲)
第83通信大隊 ミュラー少佐 (通)
第59軽高射砲大隊 ウルリヒ・シュレーダー少佐 (砲)



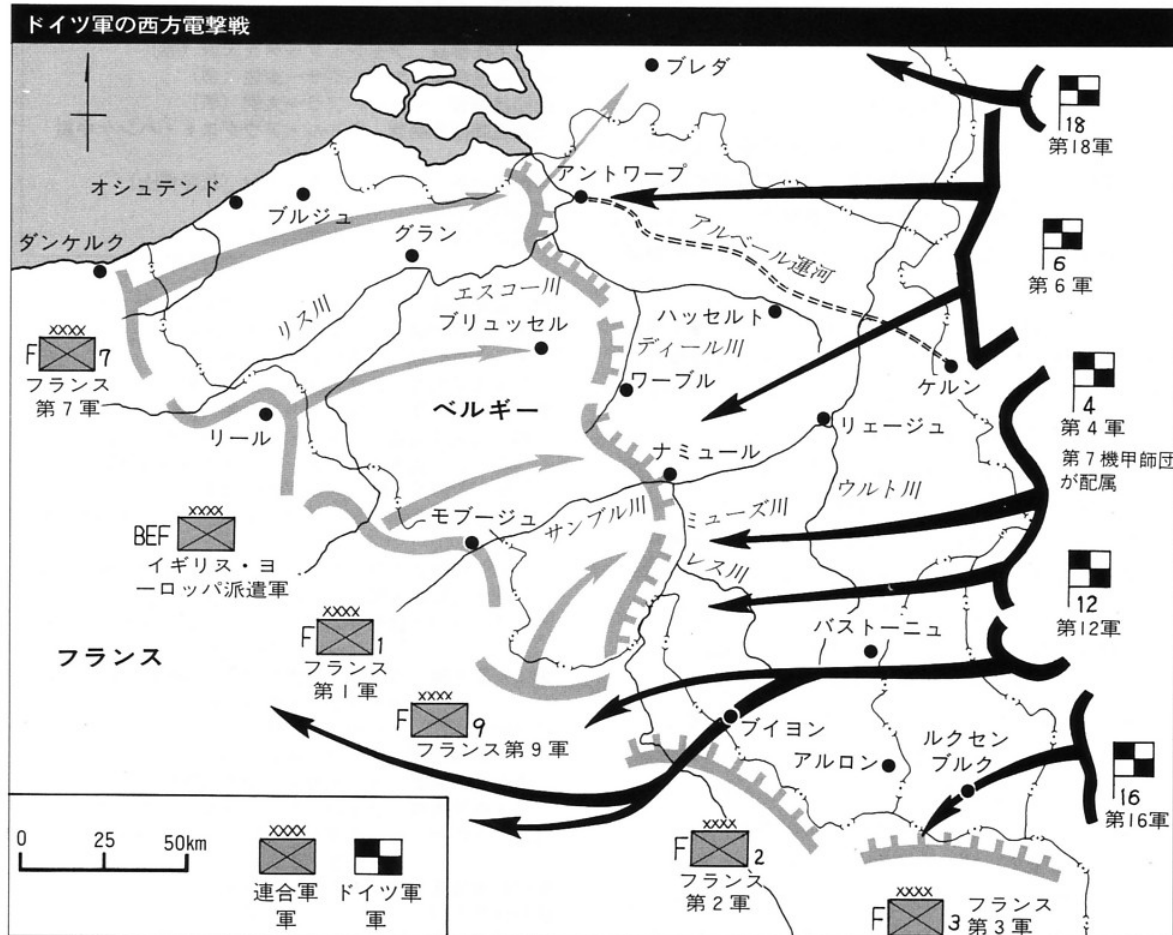
軍の戦車よりも強力な戦車でさえ簡単に降伏する。わが軍の戦車がいかに軽装備であるかを敵が知ったならば、どうなるだろうか。

このような方法により、時として負傷兵を後送中の敵の輸送部隊を巻き込んだりする事故も起きたが、結局はこのような手荒な戦法が、彼我両軍の将兵の損失を少な

くすることに役立った。そしてついに、師団は開戦から6日後の5月16日に、マジノ線前面のセルフオンテヌの森に到達した。

＋目標はイギリス海峡

彼はこの森を通過するに当たり、戦車部隊の指揮官全



員に対して、一発も弾丸を発射することなく森を通過するように命令した。そして戦車の操縦手以外の全員に対して戦車の外側に乗り、白旗を振りつつ前進するように命令した。このような突飛な行動に対して、敵は呆気にとられ、前進する戦車部隊の両側に立ち、口を開けたまま見ていた。

こうしてロンメルのはたたり戦術は見事に成功し、森を無事に通過するといちばん後方の戦車大隊に森に潜んでいる敵に対して備えをさせるとともに、前方の敵の陣地に向かって砲弾を撃ち込んだ。そして突撃工兵が掩蔽壕を爆破し、部隊はそこを通過して進撃を開始した。

進撃に当たっては、引き続き師団の全火力をもって、前進方向に向かって射撃を続け、主陣地がこんなに早く陥落するとは想像していなかったフランス軍部隊は、たちまち戦意をなくして次々と降伏した。こうして5月16日の晩に、師団はついにマジノ線の突破を果たしたのである。

翌5月17日午前5時15分、休む間もなく彼は師団に前進命令を与え、その日1日で3500名のフランス軍捕虜を得た。

ロンメルの友人のクルト・ヘッセ歩兵大佐は、当時のロンメルの様子を次のとおり伝えている。「ロンメルが装甲指揮車の上で、2名の参謀とともに、軍帽を少しずらしたまま仁王立ちになって自ら指揮をとっており、将兵全員の前進を督励しつつあった。彼は攻撃精神に燃えて火

▶今後の行動について打ち合わせを行なう偵察部隊の兵士たち
▼ドイツ軍は大きな抵抗もなく、前進を続けた

の玉のようになっていた。友軍からも、敵からもその前進を押し止められるのを我慢することができなかった」

ロンメルは、ヘッセの姿を見つけると大声で言った。「この戦争では指揮官の位置はここだ。第一線だ。この戦いを騎兵の戦闘と同じように考えなければならない。機甲師団をかつての騎兵集団と同じように使用し、将軍達が馬上で命令を下したように、移動する戦車の上で命令を発するようにしなければならない」

ロンメルは各指揮官を集めると、大声で命令した。「諸君の今後の前進路はル・カトー、アラス、アミアン、ルアンおよびル・アーブルを結ぶ線だ。燃料を補充せよ、そして前進するのだ！」





町中を進むドイツ機甲部隊

ロンメルからこのような命令を受けた将兵は驚いてしまった。ル・アーブルはイギリス海峡に面した地点にあるだけでなく、師団は丸一週間ほんの少ししか眠っていなかったからである。彼のこのような戦術は、参謀本部を驚愕させ、総統大本営を憂慮させた。それでも、各戦車隊長は、反撃を加えてきたフランス軍を迎え撃ってこれを撃退した。しかし、事態が不利となったのは、各戦車のガソリンがほとんど尽きようとしていたことだった。

第7機甲師団の残余の部隊はいぜんとしてベルギーにあり、ロンメルと連絡がとれなくなった慎重な性格の作

戦主任参謀オットー・ハイドケンパー少佐は、整然とした秩序を重んじ、臨機応変と独創的な作戦を全く理解できない典型的な参謀将校であった。

ロンメルも戦車連隊長のカール・ローテンブルク機甲兵大佐も乱戦の中で戦死したものと勝手に判断し、戦車部隊に燃料を送ろうとしなかったのである。このようなハイドケンパーの判断は、ヒトラーとその幕僚をうろたえさせ、ヒトラーは後にロンメルに対して「どうすれば君をそのような窮地から救い出せるか、私には判らなかった」と述べている。

間もなく、フランス軍が師団に対する攻撃力を弱めたことから、虎口を脱出することができたが、ロンメルは、ハイドケンパーの弱気に対して腹を立てていた。実際のところハイドケンパーに限らず、師団の参謀部はロンメルの大胆な作戦とテンポを理解できず、ロンメルは、作戦立案から指揮にいたるまで一人で切りまわしていたのである。もっともロンメルにとって、師団レベルの規模ならば、参謀をさほど必要としていなかったのであるが。

十不死身の指揮官

5月19日、ロンメルはほとんど抵抗を受けることもなくカンブレーを占領して、1000名のフランス軍を捕虜とした。この2日間の師団の戦果は、戦車100輛、装甲車輛30輛、火炮27門を鹵獲もしくは破壊し、捕虜は10,000名であった。これに対して師団の損害は、戦死35名、負傷者59名に過ぎなかった。

翌日、師団は初めてイギリス軍部隊と交戦した。H・E・フランクリン少将の指揮する混成突撃部隊「フラン

第7機甲師団は、常に友軍の先頭を切って進撃した





クフォース」の戦車74輦が、アラス南方で師団の側面に対して反撃を開始したのである。イギリス軍の装備しているマチルダII型歩兵戦車は、ドイツ軍の装備しているどの戦車、対戦車砲でも撃破することができず、第42対戦車砲大隊は蹂躪され、砲手のほとんどが戦死した。このような事態に直面して将兵はパニックに陥入った。

生まれながらにして戦場の名指揮官と言われる人物が、その真価を発揮するのはこのような瞬間である。

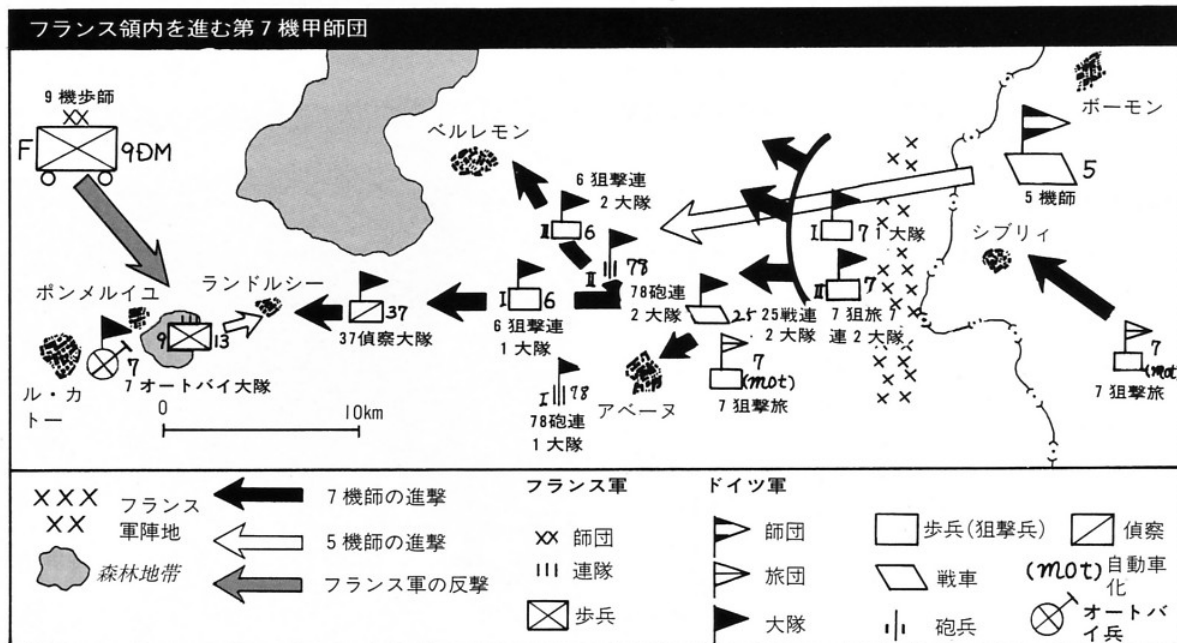
スコットランド狙撃兵部隊によって、師団の歩兵部隊が次々と斃されている時、彼は鉄道線路の土堤の上に立って戦闘を指揮し、また激しい砲弾の降り注ぐ中、停止したまま動こうとしない戦車のところへ歩いて行き、なぜ射撃をしないのか確かめたりした。

ロンメルは、自分の階級や地位について何者であるか

ということを隠そうとせず、前立ての高い軍帽、身につけている勲章、軍服の階級章、そしてその大声から敵に対しても明らかに目立つ存在であった。彼の副官モスト中尉は、このような行動の最中に敵弾に当たって戦死したが、彼自身に対しては、敵の砲弾や弾丸がまるでこれを避けるかのように外れていった。

また、彼が師団の偵察大隊長エルトマン機甲兵少佐とともに猛烈な砲火の下で、遮蔽物を求めて走っていたときに、2人の間に155mm榴弾が落下して爆発した。エルトマン少佐は背中を引き裂かれて即死したが、彼から僅か1m足らずのところにいたロンメルはかすり傷ひとつ負わなかった。

このようなことは、第一次世界大戦における各戦線での不死身の戦いぶりと相まって、彼が不死身であるとの





▲セルバンス近郊で敵と交戦するIV号戦車

伝説が甦り、部隊将兵達からはカリスマ的な存在となりつつあった。

彼は、8.8cm高射砲が徹甲弾を発射することにより、対戦車砲としての役割を果たすように造られているのを知っていたが、まだ実戦では一度も使用されたことがなかった。しかし、敵の重装甲戦車を撃破する手段に窮し、最後の切り札として徹甲弾の装填を命じ、直ちにマチルダ戦車を攻撃するよう命じた。結果はきわめて有効であり、マチルダ戦車を一蹴し、46輦のイギリス軍戦車を撃破することに成功した。この戦い以降、8.8cm高射砲は対戦車砲としての地位を確立するのである。

結局、率先陣頭に立ったロンメル の勇敢な行動と沈着冷静な判断が、部隊将兵を奮い立たせ、苦しみながらも部隊はイギリス軍の反撃に対して大きな損害を与えて撃退することに成功した。

✦騎士十字章

アラスにおける苦戦の後、ヒトラーからの命令により師団はしばらくの休息に入り、燃料の補給、装備の修理を実施した。5月26日、停止命令が撤回され、師団はラ・バッセから西に走る運河の前岸に橋頭堡を設け、翌日の午後になると、2ヵ所の応急の架橋に成功した。

この時点において、第15自動車化軍団長ホト歩兵大將は、来たるべきリールに対する攻撃のため、マックス・フォン・ハルトリーブ機甲兵中將の指揮する第5機甲師団の2コ戦車連隊を、臨時にロンメル の指揮下に置いた。ロンメルは、早速両師団の戦車部隊長会議を招集し、攻撃の作戦計画について説明した。その席上、第15戦車連隊長ヨハネス・シュトライヒ機甲兵大佐は、かねてより

▼ソナムに向けて前進する第7機甲師団の歩兵

ロンメルのことを快く思っておらず、会議の席上、ロンメル の地図の読み方が多少違っている点を辛辣に指摘することにより、ロンメルと激論を戦わせた。

シュトライヒは、後に北アフリカにおいて第5軽師団長として再びロンメルの下で戦うことになるが、ロンメルに対して執拗に反抗的な態度をとることにより、軍人としての生命を絶たれることになる。

この会議が終わるに当たり、ロンメル の党派副官カー



ル・ハンケ中尉より、ロンメルに対して騎士十字章が授与された。このことにより、ロンメルはこの戦役で騎士十字章を受けた最初の師団長となったが、これは、ヒトラーがロンメルを大いにひいきにしていた結果であり、ヒトラー自ら陸軍総司令官ヴァルター・フォン・ブラウヒッチュ上級大将に対して勲章の授与を命令し、ハンケに対して自分の代行として勲章の授与式を執り行なうよう直々に命令したのである。

リールはフランス最大の工業都市のひとつであり、ロンメルはここに一番乗りしようと決意していた。他の師団が野営の準備をしつつある報告を受けると、指揮下部隊に対して「乗車！エンジン始動！前進！」と命令した。彼のこうした性急な行動は、フランス国内に残っているイギリス・フランス連合軍の残余部隊のダンケルクへの撤退を阻むことになった。

翌5月28日早朝、ロンメルはリール市内に向けて自らの車を乗り入れたが、市内の街路にはいぜんとして敵の将兵が溢れかえっていた。彼に気付いた敵兵は、直ちに発砲したが、彼は大急ぎで車を反転させ無事に逃れた。このような迅速な前進によって、師団はフランス第1軍の半数を捕捉することができた。

彼は、リール攻略に一番乗りしたことと、フランスで最初に騎士十字章を受章した師団長ということにより、すでに伝説的な存在となりつつあった。彼はこれまでの作戦の中間報告を作成し、戦車18輛、軽戦車295輛を撃



撃破されたフランスのオチキスH-35

破、軽戦車48輛を鹵獲、6849名の捕虜を得たことを報告した。そして妻に対しては、「チューリンゲン師団にしては悪くないだろう！」と手紙で述べている。

ヒトラーは、ロンメルが送った報告書によって強い印象を受け、その結果ロンメルは、6月2日にヒトラーに謁見するフランス戦で唯一の師団長となった。ヒトラーは、自分がひいきにしているお気に入りの師団長に対して「ロンメル！」と大声で呼び、親しみを込めた態度でロンメルを迎えた。

6月5日に再び行動を開始したロンメルは、ソム川を強行渡河し、初めて見る自分達の本国のために戦いつつあったフランス植民地軍の黒人兵多数を捕虜にした。午後4時になって、ロンメルは南方に向かって劇的な進



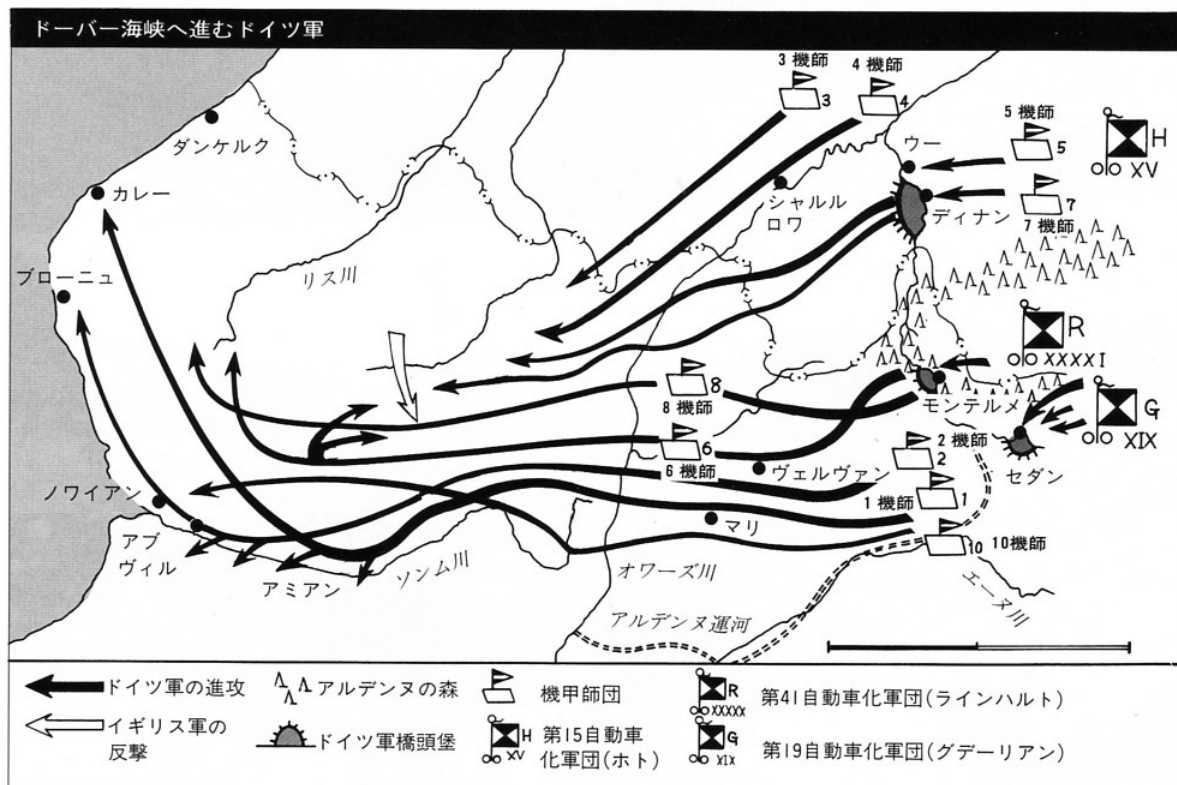


撃破したフランスのシャル B-1 bis を視察するドイツ軍将校

撃を開始した。進撃にさいしては、ロンメルが案出した「方形陣型」により前進を開始した。これは、ゆるやかな起伏が続く開いた地形において、正面と両脇に戦車大隊を配置し、後方に対戦車砲大隊と偵察大隊を配置し、歩兵連隊をこの箱型陣型の中央部に位置させて、これらの部隊を乗せたトラックを主とする輸送車輛が、あらゆる障害物を踏みつぶしながら前進する戦車の履帯の跡をたどって進むのである。

そして師団全部が箱型隊形をとり、巨大なスチーム・ローラーが動くように前進した。このようにして、師団は広々とした原野を越え、村を迂回し、散を乱して壊走する敵を踏みつぶしながら進撃を続けた。この結果、師団は1日平均80kmも進撃することができたが、実際に機甲師団がこんなに迅速に前進したことは前例がなかった。

十幽霊師団



一時停止する機甲部隊の上空を飛行するシュトルヒ連絡機



6月8日の夜、師団は全軍でいちばん最初にセヌ川に到達した。そして6月10日には、師団はついにイギリス海峡に立ったのである。休む間もなく彼は、サン・ヴァレリに集結中の敵を撃破するため西に師団を前進させた。サン・ヴァレリにはヴィクター・フォーチュン少将が指揮するイギリス第51ハイランド師団が、イギリス本国へ撤退するため乗船の準備を行ないつつあった。

しかし、第7機甲師団が町を包囲するに当たり、その状況は一変した。イギリス軍は、ロンメルが予想もしないスピードで町を包囲したことに驚いたが、すぐさま反撃に移った。しかし、急降下爆撃機による爆撃と師団の重砲による砲撃が加えられ、ロンメル自ら指揮する第25戦車連隊と第6狙撃兵連隊の一部による市街への突入により、激しく抗戦したものの、すぐさま力尽きて降伏する部隊が続出した。

一方、このような状況下においても、必死に船で脱出を試みる部隊もあったが、ことごとく師団砲兵の砲撃により撃沈されてしまった。

6月12日の午後、フォーチュン少将の他にイギリス軍とフランス軍の将官11名が降伏した。フォーチュン少将は、自分より遙かに年の若いロンメルをたたいて「お若い方、君はあまりにも早過ぎました」と述べたが、ロンメルは、フォーチュン少将に対して勇敢な戦いぶりを心から労い、丁重に扱った。フランス軍の将官は、ロンメルに対して師団名を質問した。ロンメルが「第7機甲師団です」と答えると、「またしても幽霊師団だ。われわれは何度もあなたの師団と出会い、皆あなたの師団

のことを幽霊師団と呼んでいたのです」と語った。

サン・ヴァレリの占領による師団の戦果は、戦車58輻、火砲56門、高射砲17門、対戦車砲22門、機関銃368丁、ライフル3550丁、トラック1133台、捕虜12,000名（うちイギリス兵8000名）であった。

4日間の休息の後、師団はシェルブールにいたるまでの大西洋岸の各地区の占領を命じられた。6月16日午前5時30分、師団はシェルブールを目指して進撃を開始した。師団の進撃途上において、2、3の部隊を除いて総体的には、フランス軍は厭戦的気分にひたっており、師団は大した抵抗を受けることもなく、同日1日で160kmを進撃し、翌6月17日には、320kmの前進を行なうという信じられないペースで進撃した。

このような急進撃の結果、6月18日にはフランスで最も重要な港であるシェルブールに達することができた。第7機甲師団のあまりの進撃の早さに、シェルブールの守備部隊は度胆を抜かれ、すっかり戦意を無くしてしまっていた。

同日夕方に、戦車部隊の攻撃により外郭陣地を攻略、翌6月19日早朝、師団の全火力をもって砲撃を開始し、各歩兵部隊が要塞内への突入を開始すると、守備部隊30,000名はあっけなく降伏した。

午後5時に要塞司令官によって正式に無条件降伏が行なわれ、第7機甲師団のフランスでの戦いも終了したのである。

第7機甲師団が5月10から6月19日までに挙げた戦果は、次のとおりである。



放列を敷くドイツ軍砲兵

- 戦車および装甲車輛：458輛 鹵獲もしくは撃破
- 各種火炮：341門 鹵獲もしくは撃破
- トラック：5000台 鹵獲もしくは撃破
- 乗用車：2000台 鹵獲もしくは撃破
- 牽引車：2000台 鹵獲もしくは撃破
- 兵車：400輛 鹵獲もしくは撃破
- オートバイ：400台 鹵獲もしくは撃破
- 航空機72機：鹵獲もしくは撃破
- 捕虜：97,468名（将官10名ふくむ）

短期間でフランスを降伏におい込んだドイツ機甲部隊。第7機甲師団は、常にその最先頭を走り続けた



以上のとおり、莫大な戦果である反面、この道のりが決して平坦ではなかったことは、次のとおり師団の損害を見れば明らかである。

- 戦死：682名（将校48名、下士官108名、兵526名）
 - 負傷1646名（将校77名、下士官317名、兵1252名）
 - 行方不明：266名（将校3名、下士官34名、兵229名）
- 兵員の損失は、全体で2594名であり、師団総数を約15,000名とすると実に17%の消耗率となり、この比率は、フランス戦に参加したドイツ軍師団の中で、最も多い数字であった。

第7機甲師団が幽霊師団と呼ばれ、ここまでの道のりを驚異的なスピードで進撃できたことは、ひとつにロンメルの強烈なリーダーシップおよび天才的な作戦能力によるが、一方では、急降下爆撃機を中心とする空軍に支援され、戦車部隊を中心とする打撃集団により、従来からは想像もつかないスピードとテンポでもって戦線を突破し、歩兵部隊との協力による包囲殲滅戦を展開したことによる。そして、このような新概念に対処する方法をフランス軍首脳部が見出せなかったとにより、各部隊の統一的な反撃が行なわれず、フランス軍が心理的にダメージを受けた結果も大きかったといえる。